

No. J2332

『中国開発学序説—非欧米社会における学知の形成と展開』

東京大学東洋文化研究所 特任研究員

汪 牧耘

本書は、中国の「開発学」(development studies)を手がかりに、その設立経緯と言説形成の過程を約三十年間にわたって明らかにすることで、非欧米社会における国際開発の学知の特徴と可能性を考察したものである。

21 世紀に入って、国際開発分野における中国の影響力が急速に拡大している。それとともに、国内外の研究者は、中国の地政学的な意図やその施策による経済・社会への影響に関心を寄せてきた。こうした先行研究の傾向に対して、本書では、そもそも中国において国際開発がどのように学問的に論じられるようになったのかを問う。欧米中心の開発知を批判し、自らの独自性を打ち出そうとする中国の開発学は、一見すると異質な存在ですらある。しかし、その系譜に目を向けると、国や言語を越境してきた人びとの開発実践が目に見える。中国の開発学は自らの独自性を探ろうとしているものの、それを支える知的資源の総体には、欧米や日本に共通する経験は少なからず存在し、国際社会の影響がそこに編み込まれている。中国の開発知を理解するには、表面に現れる差異だけではなく、その歴史的地層にある概念と実践の関係性に目を向けることが重要である。

本書を刊行する意義は、以下の3点である。第1に、自らの国際開発を学術的に説明しようとする中国人研究者の葛藤と工夫を浮き彫りにし、国際開発に関心を持つ読者に、「学知のあり方」という新しい観測点を提示したことである。第2に、日本と中国における開発学の形成と展開を比較し、非欧米社会における学知の批判的分析に貢献したことである。第3に、中国国内外の開発援助の現場から、援助する側・受ける側が抱えている悩みや迷いを明らかにし、中国脅威論・特殊論という短絡的な発想を打ち止めることである。「超大国」となった中国を、一人ひとりの個人の思惑を通して理解する具体的な場面は、本書の随所にある。以上、本書を刊行することで、中国における国際開発の知識生産の系譜を日本の読者が理解する一助となる。また、今後ますます盛んになると予想される非社会社会の国際開発知を論じた先駆的な事例研究となることが期待できる。